婚姻の秘跡

B. Nowak svd

人生と結婚に関する創造主の計画

イエス・キリストは、ファリサイ派の人々に離婚について聞かれたときに、次のように答えました。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とにお造りになった。」そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」（マタ 19, 4-6）このようにイエスは、質問に答えながらも、結婚のことを正しく理解するためには、「初め」のこと、つまり創造のわざを背景にして、人間の創造の理由やその目的を意識しながら、結婚のことを考えなければならないということを教えてくださったのです。

従って、結婚についてカトリック教会の教え、また、結婚と婚姻の秘跡の関係について語る前に、できるだけ簡単に創造のわざ、特に人間の創造の意義についての基本的なことを思い起こしたいと思います。創造のわざについて語る創世記には、人間が神に象って、神に似せて創造されたと書き記されています（創 1, 26）。創造主である神と被造物である人間は、まったく異なる存在ですが、私たちは、神に象って造られたというのは、まったく異なる存在でありながらも、神と共通しているところがあるということなのです。神と共通しているところとして、人間の理性とか、不滅の魂を含む霊的な次元などが考えられますが、最もすぐれたところというのは、愛する能力なのです。神がこのような能力を人間に与えてくださったのは、人間が神の愛を受けて、愛をもってこの愛に応えるため、つまり、愛に生きることによって神と結ばれるために、最終的にこの愛の絆が完成されることによって人間が神と一体になるためなのです。完全な愛によって神と一体になることこそ、人間の創造の目的であり、人間の最高の幸福の状態なのです。

創世記は、2500 年以上前に書かれたものですので、昔の人々の常識や世界観を表わしているものでありますが、同時に、神の言葉として普遍的な真理、つまりどの時代においても有効な真理を伝えています。この普遍的な真理を見出すために、文字の意味にとどまらずに、物語やいろいろな表現の象徴的な意味、並びに霊的な意味を探究すること、また、一つの啓示を伝えている聖書全

体に書かれてある言葉を互いに照らし合い、補い合うものとして見ることが必要です。

創世記の第一章によると、「神にかたどって創造された」人間は、「男と女に創造され」ました（創 1,27）。けれども、第二章では、神はまず男性を造られて、後ほど女性をお造りになったとなっています。互いに矛盾しているように見えるこの二つの話は、実際に人間についての同じ真理を伝えているのです。第二章において、神は、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」（創世記 2,18）と言ってから、いろいろな動物を造られて、それをアダムのところに連れてこられました。けれども、彼は、その内に「自分に合う助ける者は見つけることができなかった。」（創世記 2,20）現実的に考えれば、動物は、実際には人間の助けるものになっていますので、「助ける者」という表現の文字通りの意味以外に、別の意味があるということになります。前後から判断すると、「助ける者」とは、人間の愛の対象を意味します。同じように、「人が独りでいるのは良くない」という表現は、人間が誰をも愛せずに、自分のためにだけ生きるのは、人間らしい人生、つまり、創造主である神が求めるような人生にならないということを意味するのです。人間は、動物の中で、「自分に合う助ける者は見つけることができなかった。」とは、動物は、いくら可愛くても、本当の意味での人間の愛の対象にならないということを意味します。その物語の中では、女性がアダムのあばら骨で造られたことになっていますが、聖書は、このような象徴的な表現を以て、男性と女性は、本質的に同じ存在であるということを教えているのです。女性を見た男性は、「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。」という言葉で、この事実を表現しているわけです。その後、すぐに結婚の話になりますので、男性は、女性において「助ける者」、つまり、愛の対象を見出したということが分かります。ついでに創世記は、「二人は一体となる」（創世記 2,24）と宣言することによって、創造主である神は、結婚に与えた一つの大きな目的を表しています。一体になることは、相互の愛の完成の結果ですので、完全な一致をもたらす愛の完成こそが結婚の目的であるということが教えられているわけです。従って、完全な愛を目指して互いの愛を育てることは、結婚した男女の使命になるのです。この使命を果たすことによって、結婚した二人は、実際に愛に生きるわけですので、創造主である神が求めておられる人間らしい人生を送っているし、それを意識しなくても、神が定めた人生の目的に向かって生きているのです。そのために、結婚は神が定めた人生の目的への道、しかも、神がほとんどの人々のために用意してくださった、 最も自然で、最も普遍的な道であると言えるのです。

創世記が伝えているように、創造主である神は、結婚に愛の完成以外に、もう一つ重要な目的を与えました。それは、生命を伝えることです。そのために、神の望みに適う結婚は、愛と命の共同体になっているということが言えるのです。

残念ながら、人々は神を信頼して、その計画の実現に協力する代わりに、違う道を選んだ結果、初めの秩序が破壊され、多くの苦しみをもたらすいろいろな問題が生じて、愛に生きることによって自然に人生の目的に向かうことは、夫婦にとっても困難なものになってしまったのです。

結婚問題の最も基本的な原因である利己心

創世記の創造の物語の中でアダムとエバの関係は、不思議な表現で描かれています。「人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。」（創 2,25）しかし、二人は神に背いて、罪を犯した後に、「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。」（創 3,7）と書き記されています。教皇ヨハネ・パウロ 2 世は、このことを次のように説明してくださいました。まず、人間が「恥ずかしくなる」のは、誰かが自分にとって危険であると感じているときです。すなわち、「羞恥心」という感情は、人間が神からいただいた自己防衛機制の一つの重要な機能であるということなのです。罪を犯す前の人間が裸であっても、「恥ずかしがりはしなかった」のは、互いに危険なものになっていなかったからです。しかし、罪を犯した後に、相手において危険性を見出したから恥ずかしくなって、自分を守るために恥ずかしいと思ったところをいちじくの葉で隠したということです。このような物語によって聖書が教えているのは、罪を犯す前に愛の対象であった他者、つまり、全力を尽くして自分が守りたい、また、支えたいと思われた他者は、自分のために利用したいと思われるものになってしまったということなのです。言い換えれば、原罪の一つの結果として人間は、自分自身と他人の本質、自分の価値と尊厳を知らないようになり、互いに愛し合い、協力する代わりに、他者の苦しみに対して無関心になったり、他者と争ったり、他者を利用したりするようになったということです。

イエス・キリストは、この問題について山上の説教の中で次のように語られました。「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。」（マタ 5,27-28）このようにイエスが教えておられるのは、人間の根本的な問題とは、不正な行いではなく、内面的な不秩序、たとえば、人間が持っている間違った価値観とか、偽りの善、つまり、実際に自分に害を与えるものを善として見て、それを求めている欲望などのようなことであるということなのです。というのは、「みだらな思いで」

他人を見ることは、狭い意味で、自分の性欲を満たすために他者を利用することですが、広い意味では、他の人を愛すべき人間として見るのではなく、自分の楽しみや満足、また、経済的や他の利益のために利用するために可能な「もの」として見ることなのです。不正な行いは大きな問題であっても、このような内面的な問題を表面化するものにすぎないのです。

私たちは、殆どの場合意識していないが、新しい人と出会うときに自分の必要性や欲望を基準にして、この人は自分にとってどれほど役に立つだろうか、つまり、自分の必要性や欲望を満たすために、この人をどこまで利用することができるかという目でこの人を見ています。そして、誰かが自分にとって全く役に立たないと決めつけたら、この人に対して興味も、関心も生じないが、誰かがすこしでも役に立つと思ったら、興味を持って、この人と関わりながら、いろいろな方法を以てこの人を調べ続けながら、繋がりをふかめるのです。結果的に、殆どの人間関係、（同じように人間の人間以外のものとの関係）は、利己心に基づいているということが言えると思います。イエスの言葉（ルカ9,23-25）を使えば、人はこのように自分を生かすために、「世界を自分のもの」にしようとしています。けれども、このような努力が成功して、人間は「全世界を手に入れた」としても、つまり、すべての欲望を満たすことができたとしても、愛に生きることがなければ、何の得にもならず、人生に負けてしまうことにもなり得るのです。

このような自己中心的な基準に基づいて、二人の人が互いに大きな興味を持って付き合い、互いにいろいろな次元において利用し合うことは、一般的に「恋愛」と呼ばれています。この意味での恋愛関係は、自分たちにとって最高の幸福への道であると信じて、結婚する人も少なくないでしょう。けれども、結婚することによって、互いに愛を誓うつもりであっても、実際に、結婚という制度において自分を利用する許可を与え、相手を利用する許可をもらうということになるのではないかと思います。結婚によって相手を自分のものにして、自由に、好きなだけ利用する権利を得たと思って、これからいつでも、自分を生かすことができると（無意識の中でも）期待している人ががっかりして、「恋愛」の相手を妬むように、また、憎むようになるのは、当然です。というのは、相互の合意があっても、基本的に真の愛ではなく利己心に基づく結婚であるならば、愛の実践と違って、二人を生かす結合ではなく、いろいろな問題を起こす関係、二人の人間としての成長を妨げる関係になるのです。多くの場合、このような関係は相互依存にもなってしまいますので、他の依存と同じように、二人の心に深い傷を負わせ、破滅に導くものにもなり得るのです。ですから、このような動機に基づいている結婚は、創造主が定めた目的ではなく、別の方向、場合によって正反対の方向に向かっているものになっても、不思議ではないでしょう。

人間は、他人において自分に役立つものにしか興味がなくても、誰かのことをより深く知るようになるとこの人において自分に何の役にも立たないが、非常に素晴らしくて、優れた価値があると思う何か、しかも、自分が何の利益

を得ることがなくても、さらに、自分の損になっても、このような素晴らしいものを持っている人を守りたい、この人において見だした素晴らしい可能性の発展を支えたいという望みが生じることは珍しくないでしょう。このような望みは、私たちを愛に生きるために創造してくださった神の賜物、また、真の愛への招きと言えるし、真の愛の始まりとさえ言えると思います。この招きに応えて、相手との関係にコミトメント、つまり自己奉献して、結婚誓約を交わすことによって真の愛と忠実を尽くすことを誓う人も少なくないでしょう。けれども、この誓いによって表現した望みに従って生きるならば、自分の心の真の望みに従って生きることになり、最高の人生を送ることができるということを直感的に、または、理性的に知っていても、残念ながら非常に多くの人は、なかなか古い生き方から離れることができなくて、結婚誓約の言葉を守って、愛するようになった人に仕える代わりに、無関心になることや、この人を再び利用するようになることは頻繁に起こることなのです。

以上の聖書の教えをまとめて、カトリック教会のカテキズムには、次のように書かれています。「すべての人は自分の周囲や自分のうちに悪を体験します。この体験はまた、男と女との間でも見られます。男女の結合はつねに、不和、支配欲、 不忠実、しっと、憎悪や断絶に終わる衝突などの危険にさらされています。 この無秩序は、大きさには多少の相違が見られたり、それぞれの文化、時代、 個人などの努力による多少の解決がなされたりしているとはいえ、いつどこででも起こっている問題です。」（カトリック教会のカテキズム 1606）

私たちは愛に生きるために、また、結婚した男女は結婚誓約に忠実に従って、一生涯愛と忠実を尽くすことができるために、人間の心に非常に深く根ざしている利己心から解放される必要があります。何よりも、また、誰よりも自分の命、つまり自分自身のことを大切にしている自己心から解放された人だけが、神の心に適う結婚生活、または、人生そのものを送ること、しかも、消えることのない喜びと幸福に満たされた結婚生活と人生を送ることができます。それを可能にすることこそ、創造主である神が遣わしてくださった主イエス・キリストの使命であって、イエス・キリストが成し遂げてくださった救いのわざなのです。

真の愛に生きるための救いの計画

神の自己啓示の発展の過程と全人類のための救いの計画の実現の過程の記録である聖書は、「神に似せて造られた男と女の創造の話で始まり、『小羊の婚宴』（黙示録 19,9）の話で終わります。」（カトリック教会のカテキズム 1602）シナイ山で結ばれた契約に基づくイスラエルと神の関係は、聖書の多くのところで相互の愛によって結ばれた花婿と花嫁の関係、また、結婚誓約によって結ばれてから、いろいろな試練や危機を乗り越えた夫と妻の関係に譬えら

れています。このように神は、神の定めに従って結婚誓約を交わして結ばれた男女は、愛の契りに忠実に生きることによって愛において成長し、互いの結合の完成、つまり一致に向かうように、イスラエル人とだけではなく、すべての人々と愛の契約によって結ばれ、愛の交わりに生きることによって、一人ひとりの人と一体になりたいと望んでおられることを現してくださったのです。

旧約聖書において、神である主のことを忘れて、契約を裏切ったイスラエル人の不誠実は、自分の夫を裏切った妻の不倫に譬えられています。しかし、イスラエル人によって裏切られても、神はイスラエル人に対するご自分の愛とそれに基づく望みを諦めることなく、愛の契約に基づく元々の関係に戻ること、さらにそれを完成させることを望みつづけ、そのために常に働いておられることを、いろいろな仕方で、特に預言者の行いや言葉を通して表してくださいました。この望みと計画を表す代表的な言葉は、ホセア書に書き記されています。「またわたしは永遠にあなたとちぎりを結ぶ。すなわち正義と、公平と、いつくしみと、あわれみとをもってちぎりを結ぶ。わたしは真実をもって、あなたとちぎりを結ぶ。そしてあなたは主を知るであろう。」（ホセ 2,19-20［口語訳聖書］）言うまでもなく、神の誠実な愛、変わることのない愛を表しているこの言葉は、神が契約を裏切ったイスラエル人にのみ語られるものではなく、罪を犯すことによって神から離れて、利己心に束縛され、愛に生きることのできないすべての人々に語られるものであって、すべての人々のための神の約束なのです。神は、この素晴らしい約束を私たちに与えてくださっただけではなく、イエス・キリストによって、もうすでに実現してくださったのです。

イエス・キリストの最初のしるし

イエス・キリストは、ご自分の使命を現すために、カナでの婚礼の時に初めて奇跡を行いました。このしるしを理解するために、結婚はイスラエル人と神との関係、さらに、神が全人類のために求めておられるご自分との関係を表していることを意識する必要があります。カナの婚礼の時にぶどう酒がなくなったゆえに、結婚したばかりの新郎と新婦が大きな危険に直面したということは、イスラエルが神を愛せなくなって、彼らの神との関係は死にかかっていたということ、さらに、原罪の一つの結果として人間が自分の力だけでは愛に生きることができないゆえに神の望みに応えることができないということを象徴的に表しています。それから、新しい「良いぶどう酒」は、人間の神との関係に吹き込まれた神の愛と新しい命を表しているのです。

イエス・キリストが、今まで皆が飲んだぶどう酒よりも美味しいぶどう酒を供給された、しかも絶対に足りなくなることのないようにそれを溢れるほど供給された場面を見た弟子たちは、イエスを信じた、つまり、イエスが約束されたメシアであり、イスラエルと神との関係に新しい命を吹き込むことによって、それを回復させるだけではなく、今までよりも深い関係に導くために来られた方であるということが分かりました。イエスは、どんなときにも最後まで神と人間に対する愛に忠実に生き、最初のしるしによって表してくださったご自分の使命を果たし、ご自分の血を流すことによって新しい永遠の契約を結び、イスラエルだけではなく、全人類に神と素晴らしい関係に生きる可能性、しかも、今まで誰も考えられなかったほど素晴らしい関係に生きる可能性を与えてくださったのです。この意味で、イエスの時から人間は愛によって神と結ばれて、神と親しい交わりのうちに生きながら、神との完全な一致に向かって生きることができる、新しい時代が始まったといえるのです。

イエスは、カナで新しいぶどう酒を与えることによって、結婚したばかりの二人を大きな危険から救って、彼らの愛を滅びから守ったように、今、すべての人々に愛に生きることを妨げるいろいろな束縛、特に利己心の束縛から自由になる力と同時に、愛に生きるために必要な力を与えてくださるのです。ですから、原罪による心の損傷のために愛することは難しくても、キリストの助けのおかげで、不可能ではないのです。キリストに心を開いて、「キリストの杯から新しいぶどう酒を飲む」ならば、つまり、キリストに従いながら、その力を受ける人は誰でも愛に生きることができますので、結婚の召命を与えられている人は、創造主である神の初めの計画に適う結婚生活、しかも、大きな喜びに満たされた結婚生活を送ることができるのです。

カトリック教会のカテキズムの中で、イエス・キリストが救いの計画を成し遂げてくださった結果が結婚生活に及ぼす影響について次のように書いてあります。「結婚のきずなの不解消性に関するイエスの断定的な強調は人々を困惑させ、実行不可能な要求と受け取られる可能性がありました。しかし、イエスは夫婦に担うことのできない重荷、モーセの律法よりも重い荷を負わせられたのではありません。イエスは罪によって乱された創造の原初の秩序を回復するために来られ、神の国の新しい展望の中で結婚生活を生きるための力と恵みを自らお与えになります。夫婦はキリストの後に従い、自分を捨て、自分の十字架を背負ってこそ、はじめて結婚の本来の意味を『受け入れ』、キリストに助けられながらその教えに基づいて生活することができるのです。キリスト者の結婚の恵みは、すべてのキリスト教的生活の源であるキリストの十字架の実りなのです。」（カトリック教会のカテキズム 1615）

愛に生きる

イエス・キリストがご自分の生き方をもって、愛の最も完全な模範を示してくださいました。イエスの活動が始まった時からイエスと共にいて、自分の目でイエスの行いを見、自分の耳でイエスの言葉を聞いたペトロは、イエスの生き方を次の言葉を以て短くまとめました。「イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのです。」(使 10, 38) すべての福音書が伝えている通りにイエスは人を助けるために、この人が一番必要としていた善を行われました。しかも、ご自分に対して好意を持って、ご自分を受け入れた人やご自分のために何らかの善を行った人のためだけではなく、自分に対して悪意や敵意を持っていて、ご自分に害を与えた人のためにも、必要な善を行われたのです。また、人を助けることは、ご自分にとって何等かの益をもたらすときだけではなく、何の益にならなくても、逆に、何等かの損になっても、イエスは人を助けるために、自分の命を含めて、持っておられたすべてをささげられたのです。それを見ると、他の人を愛するとは、利益や損失を計算することなく、まったく無条件で、この人のために必要な善を行うこと、つまり、この人に奉仕することであるということが分かります。イエスのように誰かを愛する人、つまり真の愛をもって誰かを愛する人は、この人を助けたい気持ちがあるときにだけではなく、このような気持ちがないときにも、善を行うのです。したがって、真の愛は、自分の気持ちに左右されずに、他者のために生きるという決断であると言えるわけです。確かに、この決断に従って、人に奉仕することに喜びや充実感などのような愉快な感情が伴うと、この感情は善を行う助けになりますが、このような感情がなくても、真の愛に十分な力があるのです。

誰かのために生きるという決断である愛は、コミットメント、また、自己奉献であるとも言えます。実は、全能の神は、無力な民であったイスラエルと契約を結ぶことによってこの国民にコミットメントしてくださり、イエス・キリストが結ばれた新しい契約によって、罪の束縛によって苦しめられている全人類にコミットメントしてくださって、絶対に変わることのない永遠の愛を表してくださったのです。

真の愛について教え、ご自分の振る舞いや出会った人々に対する態度によってこの愛を実際に示してくださったイエスは、愛する人の過ち、愛する人の悪事を赦すことの必要性を強調しておられました。イエス・キリストが語られた赦しとは、愛する人の過ちや悪事、また、この人の言葉や行いによって自分にもたらされた害や自分が負わされた傷、つまり、自分の苦しい体験を忘れることとか、このようなことを我慢するようなことではありません。相手の過ちや悪事がなかったことにしたり、黙って我慢したりするのは、実際に相手にそれを許可することになります。それを愛のゆえにするつもりであっても、実際に、相手に自分の生き方を正す力がない、つまりこの人に成長する可能性がないというような絶望的な確信の表れであって、そんなつもりがなくても、愛す

る人の成長を妨げることになるのです。相手の過ちや悪事を許可する意味の許しは、真の愛の表現ではなく、それを許さなければ、相手を失うかもしれないという怖れの表現であるのです。

イエス・キリストが教えた赦しとは、愛する人と共にこの人の現実的な問題を認めたうえで、互いに力を合わせれば、この問題を解決することができるという希望を持って、相手を受け入れて、前の親しい関係に戻ることなのです。したがって、愛するとは、誰かにおいて、命を懸けて守りたい善や支えたいような素晴らしい価値を見るだけではなく、相手の足りないところや悪いところを見ながら、この人がそれを乗り越え、正すことができるという希望を持つことでもあるのです。その支えと大きな励ましである希望のために、真の愛は、その愛の対象となっている人の人間的な成長を妨げないだけではなく、その成長を促し、その人を全面的に高めるものであると言えるのです。

そのような特徴を持つ真の愛は、愉快な感情やいろいろな期待（多くの場合、何の根拠のない期待や非現実的な期待）に基づくロマンチックな愛と違って一時的なものではなく、いつまでも続く、永遠のものなのです。

神に象って創造されたすべての人々には、イエス・キリストのように愛に満たされて神の心に適う神の子になる可能性があります。イエス・キリストは、すべての人々をありのまま知っておられ、すべての人々においてこの素晴らしい可能性を見ておられたために、すべての人々、たとえ性格が悪くて、間違った価値観を持って、多くの悪事を行ったゆえに、本人を含めて誰もこの人において何の善をも見出すことができないような人をも愛することができたのです。イエスとの交わりを深めれば深めるほど、人間が神の愛によってますます豊かに満たされるし、少しずつイエスの目で他の人を見ることができるようになりますので、イエスと同じように出会うすべての人を愛することができるのです。

愛に基づき、愛の完成へと向かう結婚

イエス・キリストご自身の辛い体験や多くの人の体験が示している通り、誰かに愛されても、この愛を受け入れない人やこの愛を利用しようとしたり、この愛を滅ぼそうとしたりする人が大勢います。そのために、多くの場合は真の愛は一方的なものとなっているのです。けれども、神の計画に適う結婚が成立するために、相互の愛に基づく相互のコミットメントが必要です。実際に、「私たちは夫婦として、 順境にあっても、逆境にあっても、病気のときも健康のときも、生涯、互いに愛と忠実を尽くすことを誓います。」という結婚誓約は、このような相互のコミットメント、相互の奉献なのです。そのために、結婚誓約という形で表現された愛は、結婚誓約を交わした男女を非常に深く結ぶ、堅い絆となるのです。

神の心に適う結婚が実際に成立して、有効なものになるために、結婚する二人に、相手に自分の人生を奉献したい、相手と死ぬまで消えない絆によって結ばれたいという自由意志が絶対的に不可欠です。そのために、結婚式の司式者は、次の言葉を以て、この自由意志を確認します。「お二人は自らすすんで、この結婚を望んでいますか。」「結婚生活を送るに当たり、互いに愛し合い、尊敬し合う決意をもっていますか。」

洗礼を受けることによって原罪の束縛から解放されて、イエス・キリストと結ばれ、神の愛と神の命にあずかるようになったキリスト者、つまり愛に生きるために必要な力を与えられた者同士の結婚は、大きな恵みであると同時に、大きな使命なのです。この使命とは、ご自分の花嫁である教会に対するイエス・キリストの愛を現すこと、つまり、目に見えないキリストの愛の目に見えるしるしとなることなのです。このような使命を果たすことは、人間の力を超えているものでありますが、結婚する男女は、神の前で結婚誓約を交わすことによって、互いに奉献する二人にキリストご自身の愛が与えられますので、この使命を果たすことができるようになるのです。受洗者同士の結婚は、教会に対するキリストの愛を示すしるしであり、この愛を最大な恵みとして与えられる場ですので、秘跡となっているのです。（カトリック教会のカテキズム 1617 参照）

イエス・キリストは、結婚した受洗者同士が与えられた使命を果たすために必要な愛を絶えず与え続けていますが、二人の愛が成長し、完成されるために、結婚誓約を守ることによってこの恵みに誠実に生きることと、神の最高の賜物であるこの愛に対して開かれた心を持つ必要があります。この愛の賜物に開かれた心を持つということは、神の他の賜物、特に新しい命という大きな賜物にも開かれた心を持つということです。逆に言えば、避妊や人工中絶などによって神が授ける命に心を閉ざす夫婦は、結婚誓約を守るために必要な他の賜物にも心を閉じるということになるのです。神が与えてくださる命に対して開かれた心を持つことが結婚生活を正しく送ることにそれだけ深くつながっていますので、それを確認するために、司式者は二人の自由意志を確認した後に「お二人の家庭に恵まれる子どもを神からの恵みとして心から受け入れ、キリストとその教会の教えに従って育てますか。」という質問を付け加えるのです。

結婚の不解消性

結婚の尊さ、また、この尊さから生じる結婚の不解消性について、カトリック教会は、次のように教えています。「夫婦愛はその本性から、二人の生涯にわたる人格共同体の単一性と不解消性とを要求します。『だから、二人はもはや別々ではなく、一体である』（マタイ１９・６）。『全面的に自己を与え合うという結婚の約束を日々忠実に守りながら、彼らの交わりの中でたえず成長するように呼ばれています』（ヨハネ・パウロ二世「家庭」）。この人間的交

わりは結婚の秘跡が与えるイエス・キリストにおける交わりによって強められ、純化、完成され、ともに営む信仰生活、ともに拝領する聖体によって深められていくのです。」（カトリック教会のカテキズム 1644）「完成の認証婚は、死亡の場合を除いて人間のいかなる権力によっても、またいかなる理由によっても、解消され得ない。」（「新教会法」第 1141 条）「自分の一生を一人の人間に結びつけることは難しく、不可能のように思われるかもしれません。それだけに、神は決定的で取り消すことのできない愛でわたしたちを愛しておられ、夫婦は自分たちをはぐくみ支えるこの愛にあずかりながら自分たちの忠実を通して神の忠実な愛の証人となることができる、という福音を告げ知らせることがいっそう重要となります。しばしばきわめて困難な状況のうちにありながらも、神の恵みに助けられてこのあかしを行う夫婦は、教会共同体の感謝と支援とを受けるに値します。」（カトリック教会のカテキズム 1648）

配偶者の死亡によってしか解消され得ない、結婚が成立するために、新郎新婦が自由意思をもって、公に、つまり証人の前で、同意を交換するのは、不可欠な要素となっています。「自由意志をもって同意を交換する」とは、強制されていないこと、また自然法、あるいは教会法上の結婚の障害がないことを意味します。（カトリック教会のカテキズム 1625, 1626 参照）「同意とは、『配偶者が互いに自分を与えそして受ける人間行為』のうちに成立するものであり、それは、『わたしはあなたを妻とします』『わたしはあなたを夫とします』ということばで表されます。新郎新婦を互いに結び合わせるこの同意は、二人が「一体」となることで完成します。」（カトリック教会のカテキズム 1627）「もしもこの同意が自由意志で行われたものでないとすれば、結婚は無効です。」（カトリック教会のカテキズム 1628）

以上の意味で有効な結婚が成立するために、結婚しようと思っている男女は、結婚準備講座に参加することなどによって、結婚の意義の理解と自分たちの動機の理解を深める必要があります。それから、結婚の障害が存在していないことを確認するために、また、何らかの障害がある場合は、それをなくすために、受洗者が所属している小教区の主任司祭と面接する必要があります。

イエス・キリストご自身の教えに基づいて、カトリック教会が教えている通りに、「夫婦の自由な人間的行為と結婚の完成とによって生じるこのきずなは、取り消すことのできないもので、神の忠実さによって保証された契約の起源を明らかにするものです。」（カトリック教会のカテキズム 1640）けれども、同時に、結婚の現実に基づいて教会は次のようにも語ります。「しかし、種々さまざまな理由で、夫婦の同居が実際に不可能となることがあります。そのような場合には、教会は夫婦の別居を認めます。とはいえ、この夫婦は神の前には依然として夫と妻であり、別の人と結婚する自由はありません。このような

困難な状態での最良の解決策は、その可能性があれば、和解することです。キリスト者の共同体はこの夫婦がこのような境遇をキリスト者らしく生き、不解消のままである結婚のきずなを忠実に守るよう助けなければなりません。」（カトリック教会のカテキズム 1649）「少なからぬ国々には、民法上の離婚に頼って、民法上の再婚を行うカトリック信者が数多くいます。教会は、イエス・キリストのことば（「妻を離縁して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。夫を離縁して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる。」マルコ 10・11-12）に忠実に従い、最初の結婚が有効であれば再婚を有効とは認めません。離婚した後に民法上の再婚をした者は、客観的には神法に背く状態にあります。したがって、この状態が続く限り、聖体を拝領することができません。同じ理由から、教会のある種の任務を行うこともできません。ゆるしの秘跡によってゆるしが与えられるのはただ、キリストとの契約と忠実さのしるしである結婚を破ったことを痛悔し、まったくの禁欲生活を送る人々に対してのみです。」（カトリック教会のカテキズム 1650）

カトリック教会が認めているように、夫婦の別居や民法上の離婚さえも、避けられないことがあります。このような、結婚の破壊は、非常に残念なことですが、罪にはなりませんので、民法上で離婚したキリスト者は、聖体拝領を含めて、普段の信仰の生活を送ることができるわけです。けれども、離婚歴のあるカトリック信者は、再婚しようと思って、新しい結婚が有効になることによって、キリスト者に相応しい生き方をしたいと求めているならば、（前婚の配偶者が生きている場合のみ）前の結婚が有効であったかどうかを調べる必要があります。カトリック信者にとっては、初婚であっても、結婚相手（受洗者であっても、非受洗者であっても）に離婚歴があるならば、教会上の結婚可能状態を確認する必要があります。そのために、「結婚無効性の審理手続き」を信者の所属教会の主任司祭を通して申請することができます。名古屋の場合は、カトリック大阪教会管区・婚姻法務事務局によるこの審理の結果として、（例えば、強制されたためとか、相手について大事な事実が隠されていたために、実際に自由ではなかった、また、何らかの障害が存在していたにもかかわらず、そのまま籍を入れた、また、結婚式を行ったゆえに、）前婚は無効であったこと、つまり、民法上では有効であったこの結婚は、神の前で成立しなかったために、結婚の絆が存在していないことが正式に宣言されて初めて、神の前で有効な結婚をすることができます。けれども、無効宣言が出ないこと、つまり民法上で離婚していても、前婚が有効であったために、結婚の絆が存在しつづけ、新たな結婚ができないという判決がでることもあり得ますので、それを覚悟する必要があるのです。